The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スワヒリ語の主語への所有者上昇構文における主語選択に関わる動詞の階層
Author(s)	鈴木, 七星
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2026, 37, p. 73-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104448
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スワヒリ語の主語への所有者上昇構文における主語選択に関わる動詞の階層

Verb Hierarchies Governing Subject Choice in Subject-Oriented Possessor Raising Constructions in Swahili

鈴木　七星*

Suzuki, Nanase

0．はじめに

スワヒリ語は東アフリカで広く話されている言語で、系統的にはニジェール・コンゴ大語族に属するベヌエ・コンゴ語派の「バントイド」と呼ばれる言語群のさらに下位に分類されるバントゥ諸語と呼ばれる言語群の 1 つである [1]（米田 2022: 202）。スワヒリ語では、所有物と所有者の関係は＜所有物　属辞　所有者＞または＜所有物　所有詞＞によって表される。これらの所有関係が主語に現れる場合、以下のように「～の..が○○する」と表すのが一般的である [2]。

(1) a. Simu　ya　Juma　i-na-tetemeka.
　9.スマートフォン　9.属辞　ジュマ（人名）　SM9-PRS-震える
　「ジュマのスマートフォンが振動している」
　b. *Simu　ya　Juma　a-na-tetemeka.
　9.スマートフォン　9.属辞　ジュマ（人名）　SM3sg.-PRS-震える
　c. *Simu　ya　Juma　i-na-m-tetemeka.
　9.スマートフォン　9.属辞　ジュマ（人名）　SM9-PRS-OM3sg.-震える

---

* 大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程 (Graduate School of Humanities, The University of Osaka)

1) スワヒリ語には、バントゥ諸語に特徴的な名詞クラスと文法呼応がみられる。名詞クラスは文法的性に相当し、バントゥ諸語の中でも言語によってクラスの数が異なる（米田他 2011: 152, Bostoen & Van de Velde 2019: 5, Marten 2021: 540）。スワヒリ語の場合、全 15 クラスが存在する。動詞および名詞修飾語には、名詞が属するクラスに呼応する接辞が付加され、各クラスは番号で区別される。基本的に、番号は 1 と 2、3 と 4…といったように連続する奇数と偶数で意味的にペアとなっており、奇数クラスに名詞の単数形が、その複数形が偶数クラスに属している。例えば、*mtu*「人（単数）」は 1 クラス名詞であり、その複数形の *watu*「人々」は 2 クラス名詞である。ただし、11 クラスの複数形は 6 クラスや 10 クラスであったり、15 クラスは動詞の不定形、16-18 クラスは場所を表す名詞であったりと、例外もある。

2) 本論文で用いる略号は以下の通りである。OM=目的語接辞、PER=完了、PRS=現在、PST=過去、SM=主語接辞。名詞の前の数字は名詞が属するクラス、名詞以外の前の数字は呼応している名詞クラスを示している。人称と数に呼応している場合は 1sg.=1 人称単数、3sg.=3 人称単数のように表す。

スワヒリ語の動詞[3)]の主語接辞は主語に呼応するため、(1a)では 9 クラス名詞の *simu*「スマートフォン」に呼応する 9 クラス主語接辞 *i-*が用いられている。(1a)のように、所有者を伴う所有物が主語となる文を、本論文では所有詞構文と呼ぶことにする。この場合、主語は所有者ではなく、目的語が所有者であるわけでもないため、(1b)のように主語接辞を所有者に呼応させたり、(1c)のように目的語接辞に所有者を呼応させたりすると非文になる。

しかし、主語となる所有物が所有者から分離不可能な要素である場合には、所有詞構文を用いると、容認度が下がる。

(2) a. ??Miguu ya Juma i-na-tetemeka.
4.脚 4.属辞 ジュマ（人名） SM4-PRS-震える
「ジュマの脚が震えている」

b. Juma a-na-tetemeka miguu.
ジュマ（人名） SM3sg.-PRS-震える 4.脚
「ジュマは脚が震えている」

c. Miguu i-na-m-tetemeka Juma.
4.脚 SM4-PRS-OM3sg.-震える ジュマ（人名）
「ジュマは脚が震えている」

(2)では、主語の要素が不可譲渡性の高い *miguu*「脚」であるため、所有詞構文である(2a)は容認度が下がり、(2b)や(2c)が好まれる。(2b)では所有者が主語となり、*miguu*「脚」が動詞の後ろに置かれる。(2c)では、*miguu*「脚」が主語のまま、所有者に呼応する 3 人称単数目的語接辞 *m-*が付与され、動詞の後ろに所有者を表す名詞句が置かれる。本論文では、(2b)および(2c)のように、所有物の状態が所有者全体に及んでいるかのように表現される文を「主語への所有者上昇構文」と呼ぶ。主語への所有者上昇構文は主に、所有者と所有物の間に不可譲渡な関係がある場合に現れるが、必ずしも不可譲渡とはいえない場合にも用いられることがある。

主語への所有者上昇構文について、先行研究では、主語が所有者になる場合と所有物になる場合に着目した統語的観点と、動詞の動作性（小森 1991: 4, 7, 2013: 164, Hyman 1996: 874, Kyei-Mensah 1998: 73, 121, 古閑 2024: 104）や所有者と所有物の間の結びつきの強さ（小森 1991: 10, Keach & Rochemont 1992: 89, Kyei-Mensah 1998: 45, 米田 2016: 33, Dzahene-Quarshie 2016: 102, Van de Velde 2020: 72）といった意味的観点から説明がなされてきた。さ

[3)] スワヒリ語の動詞は、【主語接辞 - 時制接辞 - (目的語接辞-) 動詞語根(-派生接辞) - 語尾】のように、動詞語根を中心に複数の接辞が前後に付加される形で構成される。主語接辞と目的語接辞は、それぞれ主語名詞、目的語名詞の属するクラスに呼応する。主語接辞や目的語接辞が呼応する名詞句は省略可能で、その場合には主語接辞や目的語接辞が代名詞的な機能を持つ。

らに、動詞の性質が主語選択に関与し、動詞の中に所有者と所有物のいずれを主語にとりやすいかに関する階層が存在する可能性も指摘されている（小森 1991: 17）。しかし、同構文が所有者主語型と所有物主語型のいずれとして現れるかという点に関して、動詞がどのように関与し、そこに具体的にどのような階層が存在するかは、詳細に分析されてこなかった。

そこで本論文は、スワヒリ語の主語への所有者上昇構文における主語選択を対象に、動詞ごとに、所有者と所有物のどちらを主語にとりやすいかを定量化して示し、主語選択に関わる動詞間の差を記述することを目的とする。具体的には、各動詞がどちらの主語をどの程度選びやすいかを指標化し、その分布に基づいて動詞の階層化を試みる。さらに、その階層が動詞の意味分類によってどこまで説明できるのかを検討する。スワヒリ語例文は、タンザニア出身で大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻特任講師の Zainabu Kassu Isack 氏および、タンザニア出身でスワヒリ語母語話者の A 氏に確認したものである。

１．所有者上昇構文とは

所有者上昇（*Possessor Raising*, *Possessor Promotion*, *Possessor Ascension*）という名称は、所有詞句の内部にあった所有者が主語へと「上昇」する統語操作に由来する [4]。所有者上昇構文とは、主に不可譲渡名詞が用いられる場面で、所有詞句の内部にあった所有者が「昇格」して自動詞文の主語となり、その結果、元の所有物名詞句がそれまで担っていた主語としての統語的地位を失うものである（Hyman 1996: 868, 877）。所有詞構文では動詞の表す行為が所有者から物理的に離れた所有物に起こるように解釈されるのに対し、所有者上昇構文では動詞の表す変化の主体が所有者と解釈され、その変化が身体部位等を通して所有者本人に影響を与えると解釈される（Fox 1981: 326, Chappell & McGregor 1996: 7）。

(3) a. ?Kidole cha Juma ki-me-vunjika.
7.指 7.属辞 ジュマ（人名） SM7-PER-壊れる
「ジュマの指が折れた」

b. Juma a-me-vunjika kidole.
ジュマ（人名） SM3sg.-PER-壊れる 7.指
「ジュマは指が折れた」

c. Kidole ki-me-m-vunjika Juma.
7.指 SM7-PER-OM3sg.-壊れる ジュマ（人名）

[4] 所有者上昇構文は、外部所有構文（*External Possession Constructions*）、不可譲渡所有構文（*Inalienable Possession Constructions*）、全体部分構文（*Whole-Part Constructions*）として説明されることもある（Harries 1970/71, Voeltz 1976, Hinnebusch & Kirsner 1980, Myers-Scotton 1981, Keach & Rochemont 1992, Payne & Barshi 1999, 中島 2000 他）。スワヒリ語では目的語への所有者上昇構文もみられるが、本論文では主語への所有者上昇構文のみを扱う。

「ジュマは指が折れた」

(3)は、ジュマの指が折れたことを表す。所有者を伴う所有物を主語とする(3a)のような所有詞構文は、所有物が身体部位である場合に用いると独立して存在する身体部位の状態を表すように解釈され、容認度が下がる。そのため、所有者上昇構文が用いられる。主語への所有者上昇構文には 2 通りの表し方がある。(3b)は所有者が主語に上昇した例で、所有者であるジュマが主語となり、ジュマに呼応した 3 人称単数主語接辞 *a-*が用いられ、所有物は動詞の後ろに置かれる。動詞の後ろに置かれる所有物の要素は必須で（米田 2016: 34）、無標で現れる（小森 1991: 4、中島 2000: 272、小森 2013: 162）。この所有物の要素は動詞の直後から離れると非文となる（小森 1991: 7）。このような所有者上昇という統語操作は、スワヒリ語、ハヤ語、ガンダ語、ルワンダ語、ソト語、スクマ語、ルバ語、プヌ語など多くのバントゥ諸語にみられる（Hyman 1996: 866）。バントゥ諸語にみられる主語への所有者上昇構文は主に(3b)のような形が該当するが、スワヒリ語においては(3c)のように、主語となる所有物名詞の所有表現に含まれていた所有者が、目的語接辞の呼応を受ける形で上昇する形もみられる。(3c)では、主語は *kidole*「指」のままで主語接辞は所有物 *kidole*「指」に呼応し、所有者であるジュマに呼応した 3 人称単数目的語接辞 *m-*が置かれ、動詞の後ろに所有者の要素が無標で置かれる（小森 1991: 15, 2013: 164）。

先行研究では、主語への所有者上昇構文にみられる所有物の性質と動詞の意味的特徴について以下のように説明されてきた。まず、所有者上昇構文にみられる所有物は所有者と結びつきの強いものであり、動詞の表す状態や変化が所有物を通して所有者にも及ぶような関係性があることが指摘されている（Hyman 1996: 872, 小森 2013: 161, 古閑 2024: 106）。そのため、身体部位は所有者上昇構文に現れる典型的な所有物の要素であるが、衣服のような譲渡可能名詞でも所有者上昇が起こり得るとされる（Hinnebusch & Kirsner 1980: 4,8, Myers-Scotton 1981: 160）。

動詞については、非意志的で動作性が低いものが主語への所有者上昇構文に現れやすいとされる（小森 1991: 7, 古閑 2024: 104）。例えば、出現、発生、存在、状態（古閑 2024: 104）、自然発生的状況変化、生理的状態変化（古閑 2024: 106）、状態変化（小森 2013: 164）、対象物である名詞句を一項だけとる一項動詞（小森 1991: 4）、精神状態や感情を表す動詞（Kyei-Mensah 1998: 73）などである。Kyei-Mensah（1998: 73-74）は、これらに加え使役動詞も一部含まれると説明する。

小森（1991, 2013）、Kyei-Mensah（1998）、古閑（2024）は、こうした意味的特徴を踏まえつつ、主語要素に着目したより統語的な観点から説明をしている。Kyei-Mensah（1998）は、主語への所有者上昇構文にみられる 2 通りの表し方のうち、所有物を主語とする形を基本形とし、所有者を主語とする形はその関連する構文の中の 1 つとして位置付けている。主語への所有者上昇構文には所有者主語と所有物主語の 2 通りの表現方法があり、動詞の形

を変えずに両者が主語になりうることから、小森（1991, 2013）は同構文を主語交替現象として捉えている。古閑（2024）も、スワヒリ語との比較を通じてアカン語の主語交替現象を論じている。さらに小森（1991: 17）は、所有者と所有物のどちらが主語になるかについては、基本的に特定の動詞では主語に所有者または所有物をとる方が自然である、というような階層が存在し、そこには動詞の意味的な側面が関与していると述べている[5)]。

このように、スワヒリ語の主語への所有者上昇構文については、所有物と動詞の意味的特徴や、どのような形で表されるかという統語的特徴についてこれまで述べられてきたものの、所有者上昇構文の主語決定に基づく動詞の階層の詳細や、主語要素と動詞の意味の対応に関する広範な説明はこれまでなされていない。次章では、主語選択とそこに動詞がどのように関わっているかを定量的に示し、同構文の意味的特徴と統語的特徴の関連を示していく。

２．主語選択にみられる動詞の階層

主語への所有者上昇構文には所有者が主語となる形と所有物が主語となる形の 2 つがあり、その中でも、所有者主語のみが容認される場合、所有物主語のみが容認される場合、両者が容認される場合が存在する。

(4) a. Ni-me-furahi moyo.
SM1sg.-PER-喜ぶ 3.心
「私は喜んでいる」
b. *Moyo u-me-ni-furahi.
3.心 SM3-PER-OM1sg.-喜ぶ

例えば、(4)のように動詞 *furahi*「喜ぶ」が所有物 *moyo*「心」と共起する場合、所有者のみ主語になることができるため、(4a)のように所有者を主語として動詞の後ろに *moyo*「心」を置く所有者上昇構文は容認されるが、(4b)のように所有物の *moyo*「心」を主語とする形は非文となる。

---

5) 具体的には、*choka*「疲れる」、*pona*「治る」、*poa*「冷める」、*umia*「痛い」は主語として所有者のみをとる動詞で（小森 1991: 16-17）、*vunjika*「壊れる」、*nukia*「香る」、*lowa*「濡れる」は所有物が主語になることも可能だが、所有者が主語になる方が自然な動詞であるとされる（小森 1991: 17）。小森（2013: 167）は、*vunjika*「壊れる」、*nukia*「香る」、*lowa*「濡れる」のような動詞で人が主語になることが望まれるのは、あくまでも人の状態を表していると捉えられる動詞であるためと考察している。これに対し、*pasuka*「裂ける」、*chubuka*「擦りむく」、*enda*「行く」は所有物が主語になる方が自然な動詞であり（小森 1991: 17）、これらが所有物を主語にとりやすいのは、身体部位の状態変化を表す動詞として捉えられるためだと説明されている（小森 2013: 168）。

(5) a. *Juma　　a-na-cheza　　mdomo.
　　ジュマ（人名）　SM3sg.-PRS-遊ぶ　3.口
　b. Mdomo　u-na-m-cheza　　Juma.
　　3.口　　SM3-PRS-OM3sg.-遊ぶ　ジュマ（人名）
　　「ジュマが（何か言いたげに）口をモゴモゴさせている」

(5)は状態動詞 *cheza*「遊ぶ」が *mdomo*「口」と共起して、何か言いたげな状態を表している。動詞 *cheza*「遊ぶ」が所有物 *mdomo*「口」と共起する場合には、所有物のみ主語になることができる。そのため、(5a)のように所有者を主語にすることはできず、(5b)のように所有物のみを主語にとることができる。

さらに、所有者と所有物のいずれも主語になることができる場合もある。

(6) a. Juma　　a-me-chiririka　　jasho.
　　ジュマ（人名）　SM3sg.-PER-垂れる　5.汗
　　「ジュマは汗が垂れている」
　b. Jasho　li-me-m-chiririka　　Juma.
　　5.汗　　SM5-PER-OM3sg.-垂れる　ジュマ（人名）
　　「ジュマは汗が垂れている」

(6)は、*chiririka*「垂れる」という動詞と *jasho*「汗」という要素を用いて、ジュマの汗が垂れている様子を表す。このとき、所有者を主語とする(6a)と、所有物を主語とする(6b)はどちらも成立する。

なお、主語への所有者上昇構文のうち、所有者を主語とする形では、動詞が受動化することがある。ただし、所有者主語型での受動化の有無という形態的差異は、主語選択とは別の論点であるため、ここでの分析では所有者を主語とする場合の受動化の有無は区別しないこととする。

このような統語的特徴を持つスワヒリ語の主語への所有者上昇構文において、本研究で分析対象となる例文[6]には以下のような所有物の要素と動詞が含まれる。所有物はまず身体の一部を表す身体部位とそれ以外のモノに大別される。身体部位は、さらに外部器官、

[6] 本論文で分析対象となる例文は、①書籍から収集した自然例、②Zainabu Kassu Isack 氏と、A 氏の確認を経た自作例文の 2 種類から構成される。引用元となる書籍は、Muhammed Said Abdulla の *Mzimu wa Watu wa Kale*（1960）、M. S. Mohamed の *Kiu*（1972）、Josiah Mwangi Kariuki の *Mau Mau Kizuizini*（1975）、Said A. Mohamed の *Kitumbua Kimeingia Mchanga*（2000）、作者不明の *Hekaya za Abunuwas na Hadithi Nyingine*（2003）、Adam Shafi の *Kuli*（2005）、Emanuel Mbogo の *Siri za Maisha*（2010）、A.E. Musiba の *Kufa na Kupona*（2018）、短編集 *Ndege-Maji Ufukweni: Mkusanyiko wa Hadithi kwa Vijana wa Afrika* に収録されている Tamanda Kanjaye の *Mpangilio wa Kulala*（2019）、Faraji Jatalambulla の *Simu ya Kifo*（2022）である。

内臓、意識、感情、炎症、分泌物、周辺要素、言葉に下位分類される。外部器官には、実体があり他者から知覚可能な *macho*「目」、*uso*「顔」、*mkono*「手」など 13 種類の要素が含まれる。内臓には *koo*「喉」、*moyo*「心臓」、*tumbo*「お腹」の 3 種類、意識には *fahamu*「意識」と *roho*「魂」の 2 種類が含まれる。感情には *fikira*「考え」、*chuki*「嫌悪」、*hofu*「恐怖」など 12 種類、炎症は *vipele*「吹き出物」、分泌物は *damu*「血」、*jasho*「汗」、*makamasi*「鼻水」など 5 種類が含まれる。周辺要素は *nywele*「髪」、*kucha*「爪」、*jino*「歯」の 3 種類であり、これらは日常生活で身体から脱落したり生え変わったりしうる身体部位として位置付ける。言葉を表す要素は *maneno*「言葉」である。*tumbo* は腹部全体を指す語であり、文脈によって外部器官としても内臓としても解釈されうるため、両方に分類している。モノについては、*nguo*「服」、*shati*「シャツ」、*soksi*「靴下」、*viatu*「靴」といった衣服に加え、*kiko*「パイプ」と *kitabu*「本」が含まれる。

動詞については、身体部位と共起するものは、身体や外観の状態を表す動詞、空間的な移動や位置変化を表す動詞、量や有無の変化を表す動詞、感情・心理状態を表す動詞、および目的語をとる動作動詞の概ね 5 つに分類できる。状態や変化を表す動詞には、*lowa*「濡れる」、*tetemeka*「震える」、*ning'inia*「ぶら下がる」などの 17 の動詞が含まれる。移動や位置変化を表す動詞には、*paa*「飛ぶ」、*ponyoka*「落ちる」、*toka*「出る」などの対象となる要素が移動することを表す 10 の動詞が含まれる。増減を表す動詞には、*jaa*「いっぱいになる」、*isha*「なくなる」、*zidi*「悪化する」、*pungua*「減る」の 4 つが含まれる。感情や心理状態を表す動詞には、*choka*「疲れる」と *furahi*「喜ぶ」が含まれる。動作動詞には *piga*「殴る」と *uma*「噛む」[7]が含まれる。なお、分析対象となる例文には、*piga moyo*「ドキドキする」や *waka moto*「火が燃える」が *kichwa*「頭」と共起して「悩み事がある」を意味するように、イディオム化した表現も含まれる。動作動詞の 2 つのみ他動詞であり、それ以外の 94%[8]は自動詞であることから、先行研究と同様に、主語への所有者上昇構文に現れる動詞は自動詞が大半であるという傾向が確認できる。モノを表す所有物と共起する動詞は、状態動詞である *lowa*「濡れる」、*nuka*「臭う」、*katika*「切れる」と、移動動詞である *ponyoka*「落ちる」と *toka*「出る」である。モノと共起する動詞は全て自動詞である。

主語への所有者上昇構文において、同構文が統語的にどのような形で現れるかを決定するのには、動詞が主に関わっている。そこで以下では、分析対象となる例文に基づき、(i) 主語決定に関わる動詞の階層を 2 段階に分けて分析し、(ii) (i)の階層に動詞の意味分類がどのように関わっているかを明らかにする。なお、全ての動詞と所有物の組み合わせで例が作れるわけではなく、実際に文として成立する例が得られた組み合わせが分析対象となる。

(i)に関して、主語決定に関わる動詞の階層は 2 つある。1 つ目に、主語要素が何になるか

---

[7] *uma* は「噛む」と「痛む」の両方の意味を持つが（TUKI 2014: 608）、本論文では「噛む」の意味で扱うことにする。

[8] 本論文における数値の表記は、有効数字 2 桁とし、3 桁目を四捨五入して示す。

という論点に基づく階層、2 つ目に、主語要素の現れ方によって分かれたパターンそれぞれの中にみられる動詞間の階層である。1 つ目の主語要素がどのように現れるかについては、まず主語要素が決まる動詞と、主語要素が共起する所有物により変動する動詞に分けられる。前者については主語要素が所有者のみ、所有物のみ、所有者と所有物のいずれも主語になれる、という 3 パターンのいずれになるかが決まるが、後者では共起する所有物の要素によって主語要素が異なる。所有者のみ主語にとれる動詞には *nuka*「臭う」、*furahi*「喜ぶ」などの 5 動詞が、所有物のみ主語にとれる動詞には、*simama*「立つ」、*isha*「なくなる」などの 7 動詞が、所有者と所有物のいずれも主語にとれる動詞（以下、主語交替可能動詞）には、*ning'inia*「ぶら下がる」、*kauka*「乾く」などの 16 動詞が含まれる。例えば、常に所有者を主語にとる動詞の 1 つ *nuka*「臭う」は、以下のように現れる。

(7) a. Mtoto a-na-nuka soksi.
1.子ども SM3sg.-PRS-臭う 9.靴下
「子どもは靴下が臭う」
b. *Soksi i-na-m-nuka mtoto.
9.靴下 SM9-PRS-OM3sg.-臭う 1.子ども

(7)は、動詞の *nuka*「臭う」と所有物の *soksi*「靴下」を用いて子どもの靴下が臭うという状況を表す。このとき、(7a)のように所有者を主語とする所有者上昇構文のみ容認され、(7b)のように所有物を主語とし、所有者に呼応した目的語接辞を置く形は非文となる。

次に、どの所有物と共起しても所有物のみ主語にとることができる動詞の *isha*「なくなる」の例を以下に示す。

(8) a. *Ni-li-isha usingizi.
SM1sg.-PST-なくなる 11.眠気
b. Usingizi u-li-ni-isha.
11.眠気 SM11-PST-OM1sg.-なくなる
「私は眠気がなくなった」

(8)は、「私」の眠気がなくなったことを表す。*isha*「なくなる」という動詞を用いて *usingizi*「眠気」がなくなることを説明する場合、(8a)のように所有者を主語とする所有者上昇構文は非文となり、(8b)のように *usingizi*「眠気」を主語とし、所有者に呼応する 1 人称単数目的語接辞 *ni-*を置く所有者上昇構文が用いられる。

(9) a. *Ni-me-isha vipele.
SM1sg.-PER-なくなる 8.吹き出物
b. Vipele vi-me-ni-isha.
8.吹き出物 SM8-PER-OM1sg.-なくなる
「私は吹き出物がなくなった」

isha「なくなる」は感情を表す名詞と共起することが多いが、(9)のように炎症と共起することもでき、その場合も(9a)のように所有者を主語とすると非文で、(9b)のように所有物を主語とする形が用いられる。

共起する所有物の意味分類に関係なく、所有者と所有物のいずれも主語としてとることができる交替可能動詞の 1 つである *ning'inia*「ぶら下がる」は、以下のように現れる。

(10) a. Mzee a-me-ning'inia ngozi.
1.老人 SM3sg.-PER-ぶら下がる 9.皮膚
「老人は皮膚が垂れ下がっている」
b. Ngozi i-me-m-ning'inia mzee.
9.皮膚 SM9-PER-OM3sg.-ぶら下がる 1.老人
「老人は皮膚が垂れ下がっている」

(10)は、老人の皮膚が垂れ下がっている様子を表す。(10a)のように所有者を主語として所有物を動詞の後ろに置く形と、(10b)のように所有物を主語として所有者に呼応した 3 人称単数目的語接辞 *m-*を付加する形のいずれも認められる。

主語の要素が共起する所有物によって異なる動詞（以下、所有物依存動詞）は、*chubuka*「擦りむく」、*ng'oka*「抜ける」、*ota*「生える」などの計 11 が確認された。例えば、*chubuka*「擦りむく」という動詞は共起する所有物によって主語が所有者のみ、所有物のみ、交替可能となる場合の 3 パターンみられる [9]。

(11) a. Ni-me-chubuka uso.
SM1sg.-PER-擦りむく 11.顔
「私は顔を擦りむいた」
b. *Uso u-me-ni-chubuka.
11.顔 SM11-PER-OM1sg.-擦りむく

[9] 小森（1991: 17）では、*chubuka*「擦りむく」という動詞は所有物を主語にとる方が自然な動詞として挙げられているが、Isack 氏への聞き取りでは所有者の方が主語になる例が多くみられた。

(11)は、*chubuka*「擦りむく」が現れる場合、所有者のみ主語になれる例である。(11a)のように所有者を主語とする形のみ容認され、(11b)のように所有物を主語とする形は非文となる。*uso*「顔」の他に、*shavu*「頬」、*mgongo*「背中」、*mabega*「肩」、*kichwa*「頭」が共起する場合も所有者のみを主語にとる。これに対し、所有物のみを主語にとることもある。

(12) a. *Ni-me-chubuka mkono.
SM1sg.-PER-擦りむく 3.手
b. Mkono u-me-ni-chubuka.
3.手 SM3-PER-OM1sg.-擦りむく
「私は手を擦りむいた」

(12)は *mkono*「手」が所有物として現れる例である。所有者を主語とする(12a)は非文となり、所有物を主語として所有者に呼応する 1 人称単数目的語接辞 *ni-*を伴う(12b)のみ用いることができる。*chubuka*「擦りむく」と共起して必ず所有物が主語になるのは *mkono*「手」のみである。所有者と所有物のいずれも主語にとれる場合もある。

(13) a. Ni-me-chubuka tumbo.
SM1sg.-PER-擦りむく 5.お腹
「私はお腹を擦りむいた」
b. Tumbo li-me-ni-chubuka.
5.お腹 SM5-PER-OM1sg.-擦りむく
「私はお腹を擦りむいた」

chubuka「擦りむく」が *tumbo*「お腹」と共起すると、所有者を主語とする(13a)と所有物を主語にとる(13b)の両方を用いることができる。*chubuka*「擦りむく」と共起する場合に主語交替可能な要素には、他にも *mdomo*「唇」と *mguu*「脚」が挙げられる。

このように、主語要素が一律なのかそうでないのか、一律である場合には何が主語になるのか、といった主語要素がどうなるかという点に基づく動詞の階層がまず確認できる。もう 1 つの階層として、主語要素の現れ方のパターンそれぞれの中にみられる動詞ごとの差が挙げられる。具体的には、特定の動詞が、所有者と所有物のどちらを主語にとる傾向にあるかという偏りと、共起する所有物によって主語の現れ方がどれだけ異なるかという分散の大きさである。所有者か所有物のいずれかが必ず主語になる動詞の中ではこのような階層は生じず、所有物依存動詞と主語交替可能動詞においてこのような差がみられる。主語交替可能動詞の中でも階層がみられるのは、所有者主語・所有物主語の双方が自然に用いられる場合（以下、対称的交替）だけでなく、いずれも文法的には容認されるが一方

が相対的に自然である場合（以下、非対称的交替）も存在するためである。

動詞に関する、以上の主語選択の偏りと、共起する所有物に応じた主語選択の変動の 2 点を定量的に記述するため、本論文では各動詞について、共起が確認された所有物の種類ごとに主語選択の点数を付与し、その平均値と分散を算出する。動詞 v に対し、共起することのできる所有物の種類を $i=1, 2, .., N_v$ とし、各所有物に対する点数 $x_{v,i}$ を、-2, -1, 0, 1, 2 とする。ここで N_v は、動詞 v と実際に共起が確認され、文として成立した所有物の種類数である。また、i はその所有物の種類を区別するための番号であり、$x_{v,i}$ は所有物 i に対して付与された主語選択の点数を表す[10]。点数の付与は、当該所有物が動詞 v と共起する場合の主語選択のパターンに基づき、所有者のみが主語として容認される場合を+2、所有物のみが主語として容認される場合を-2 とする。また、主語交替が可能である場合には、対称的交替では 0 とし、非対称的交替については、所有者主語の方が相対的に自然である場合を+1、所有物主語の方が相対的に自然である場合を-1 とする。

このとき、動詞 v が所有者主語と所有物主語のいずれに偏るかは、点数の平均 μ_v によって表す[11]。

$$\mu_v = \frac{1}{N_v}\sum_{i=1}^{N_v} x_{v,i}$$

平均 μ_v が正の数であるほど当該動詞は所有者主語に偏り、負の数であるほど所有物主語に偏ると解釈できる。さらに、共起する所有物に応じて主語要素の現れ方がどれだけ変動するかは、平均との差の 2 乗平均として定義される分散 σ_v^2 により表す。

$$\sigma_v^2 = \frac{1}{N_v}\sum_{i=1}^{N_v}\left(x_{v,i}-\mu_v\right)^2$$

分散 σ_v^2 が小さいほど、共起する所有物が変わっても主語選択が一貫していることを示し、σ_v^2 が大きいほど、共起する所有物に応じて主語要素の現れ方が変化しやすいことを示す。

例えば、*chubuka*「擦りむく」について、共起できる所有物は計 9 種類であり、その内訳は所有者のみ主語にとる場合が 5 種類、所有物のみ主語にとる場合が 1 種類、対称的交替が 3 種類である。先述の点数規則に従うと、各所有物の点数 x_i は+2 が 5 個、-2 が 1 個、0 が 3 個となる。ここから、主語要素の平均 μ は次のように算出される。

---

[10] 本研究では、N_v は所有物の出現回数ではなく、所有物の種類数に基づく。

[11] Σ は、i=1 から N_v までの全ての所有物の種類について、それぞれの点数を足し合わせることを意味する。

動詞と共起した所有物種類数 $N = 9$

合計点 $= 5\times(+2) + 1\times(-2) + 3\times(0) = 8$

平均 μ = (合計点) / N = 8 / 9 = 0.89

したがって、*chubuka*「擦りむく」は平均の点数が正であるため、全体としては所有者主語に偏る傾向を示す。次に、共起する所有物に応じた主語要素の変動の大きさを、平均との差の 2 乗平均として定義される分散 σ^2 により表す。すなわち、σ^2 = (各所有物について$(x_i - \mu)^2$を合計) / N であり、*chubuka*「擦りむく」の場合は以下の通りである。

$x_i = +2$ のとき: $(2 - 8 / 9)^2 = (10 / 9)^2 = 100 / 81$ が 5 個

$x_i = 0$ のとき: $(0 - 8 / 9)^2 = (8 / 9)^2 = 64 / 81$ が 3 個

$x_i = -2$ のとき: $(-2 - 8 / 9)^2 = (- 26 / 9)^2 = 676 / 81$ が 1 個

2 乗和 $= 5 (100 / 81) + 3 (64 / 81) + 1 (676 / 81)$

分散 σ^2 = (2 乗和) / 9 = (1368 / 81) / 9 = 1368 / 729 = 1.9

このように、平均 μ は所有者主語寄りか所有物主語寄りかという主語選択の傾向を、分散 σ^2 は、特定の動詞に関する、共起する所有物ごとの主語選択の変動の大きさを表す。

分析対象となる主語への所有者上昇構文の例文に現れた動詞と、その主語選択に関する平均 μ と分散 σ^2 の点数を、平均 μ を基準に並べた表を以下に示す。表の中で、平均 μ が 2 である動詞は常に所有者を主語にとるもので、平均 μ が-2 であるものは常に所有物を主語にとるものである。

所有者と所有物のいずれも主語にとりうる動詞は、主語選択の平均 μ と、所有物の種類に応じた主語選択の分散 σ^2の観点から、概ね 2 つに下位分類できる。1 つ目に、*iva*「赤くなる」、*nguruma*「ゴロゴロと鳴る」、*ng'aa*「光る」、*tetemeka*「震える」、*tundizika*「宙吊りになる」、*ning'inia*「ぶら下がる」、*jaa*「いっぱいになる」、*anguka*「落ちる」、*shuka*「落ちる」、*panda*「上る」、*chiririka*「垂れる」、*dondoka*「落ちる」、*ponyoka*「落ちる」のように、平均 μ が 0 で分散 σ^2も 0 となる動詞群がある。これらは、対称的交替を示す動詞で、主語がどちらになるかが所有物ごとに異なることなく、主語交替が安定して成立する動詞として位置付けられる。

2 つ目に、主語交替自体は可能であるものの、所有者主語または所有物主語のいずれかに軽度の自然さの偏りがみられる動詞がある。例えば *zidi*「悪化する」や *fura*「膨れる」は、偏りの解釈では所有者主語寄りに位置づけられる一方、分散の解釈からは、分散が比較的小さく、共起する所有物による主語選択の変動は小さい。これに対し、*kauka*「乾く」は、偏りの解釈において所有物主語寄りであると同時に、分散の解釈においても相対的に分散が大きい。すなわち、*kauka*「乾く」は主語交替可能でありながら、共起する所有物によっ

表：主語への所有者上昇構文における動詞別点数分布と共起可能な所有物例

動詞		N（点数の内訳）	共起できる所有物例	平均 μ	分散 σ^2
状態	*nuka*「臭う」	13 (13(+2))	*mwili*「身体」, *shati*「シャツ」	2.0	0.00
	lowa「濡れる」	9(9 (+2))	*mguu*「脚/足」, *viatu*「靴」		
	vunjika「壊れる」	7(7 (+2))	*mguu*「脚/足」, *moyo*「心」		
感情	*choka*「疲れる」	8(8 (+2))	*kichwa*「頭」, *macho*「目」		
	furahi「喜ぶ」	1(1 (+2))	*moyo*「心」		
状態	●*katika*「切れる」	10 (8(+2), 1(0), 1(-1))	*mguu*「脚」, *shati*「シャツ」	1.6	0.64
	●*ng'oka*「抜ける」	2 (1(+2), 1(0))	*jino*「歯」, *kucha*「爪」	1.0	1.0
	●*fumbuka*「開く」	2 (1(+2), 1(0))	*macho*「目」, *moyo*「心」	1.0	1.0
	●*chubuka*「擦りむく」	9 (5(+2), 3(0), 1(-2))	*shavu*「頬」, *uso*「顔」	0.89	1.9
	●*ota*「生える」	3 (1(+2), 2(0))	*jino*「歯」, *vipele*「吹き出物」	0.67	0.89
	fura「膨れる」	10 (8(0), 2(+1))	*uso*「顔」, *tumbo*「お腹」	0.20	0.16
	●*vimba*「腫れる」	12 (1(+2), 1(+1), 9(0), 1(-2))	*macho*「目」, *shavu*「頬」	0.080	0.74
増減	*zidi*「悪化する」	13 (1(+1), 12(0))	*makamasi*「鼻水」, *usingizi*「眠気」	0.077	0.071
状態	*iva*「赤くなる」	3(3 (0))	*uso*「顔」, *macho*「目」	0.00	0.00
	nguruma「ゴロゴロと鳴る」	1(1 (0))	*tumbo*「お腹」		
	ng'aa「光る」	1(1 (0))	*macho*「目」		
	tetemeka「震える」	5(5 (0))	*mdomo*「口/唇」, *mguu*「脚/足」		
	tundizika「宙吊りになる」	2(2 (0))	*roho*「魂」, *moyo*「心」		
	ning'inia「ぶら下がる」	2(2 (0))	*ngozi*「皮膚」, *shavu*「頬」		
増減	*jaa*「いっぱいになる」	12(12 (0))	*wasiwasi*「不安」, *chuki*「嫌悪」		
移動	*anguka*「落ちる」	1(1 (0))	*mdomo*「唇」		
	shuka「落ちる」	1(1 (0))	*shavu*「頬」		
	panda「上る」	1(1 (0))	*hasira*「怒り」		
	chiririka「垂れる」	5(5 (0))	*jasho*「汗」, *machozi*「涙」		
	dondoka「落ちる」	5(5 (0))	*damu*「血」, *makamasi*「鼻水」		
	ponyoka「落ちる」	4(4 (0))	*maneno*「言葉」, *kiko*「パイプ」		
状態	*kauka*「乾く」	5 (1(+1), 2(0), 2(-1))	*makamasi*「鼻水」, *koo*「喉」	-0.20	0.56
動作	●*uma*「噛む」	14 (12(0), 1(-1), 1(-2))	*kichwa*「頭」, *macho*「目」	-0.21	0.31
増減	●*pungua*「減る」	4 (1(+2), 1(+1), 2(-2))	*damu*「血」, *hofu*「恐怖」	-0.25	3.2
移動	●*toka*「出る」	21 (2(+2), 12(0), 4(-1), 3(-2))	*tumbo*「お腹」, *jino*「歯」	-0.29	1.1
	●*ruka*「飛ぶ」	3 (2(0), 1(-2))	*roho*「魂」, *fahamu*「意識」	-0.67	0.89
	●*potea*「なくなる」	3 (1(0), 2(-2))	*usingizi*「眠気」, *wasiwasi*「不安」	-1.3	0.89
状態	*simama*「立つ」	1(1 (-2))	*nywele*「髪」	-2.0	0.00
	cheza「遊ぶ」	1(1 (-2))	*mdomo*「口」		
	waka moto「火が燃える」	2(2 (-2))	*kichwa*「頭」, *tumbo*「お腹」		
増減	*isha*「なくなる」	7(7 (-2))	*hofu*「恐怖」, *mawazo*「考え(事)」		
移動	*tambaa*「這う」	11(11 (-2))	*kero*「悩み」, *usingizi*「眠気」		
	paa「飛ぶ」	3(3 (-2))	*roho*「魂」, *usingizi*「眠気」		
動作	*piga*「殴る」	1(1 (-2))	*moyo*「心臓」		

●：所有物依存動詞

て主語選択の自然さが変動しやすく、主語交替の安定性が相対的に低い動詞であることを意味する。以上より、主語交替可能動詞は、対称的交替が一貫して観察される中立な動詞群と、主語交替の可能性を保ちつつも主語選択の傾向や共起する所有物ごとの主語選択に差が現れる動詞群に区別される。特に後者では、平均 μ によって所有者主語寄りまたは所有物主語寄りという方向性の階層が得られるだけでなく、分散 σ^2によって、共起する所有物に依存して主語選択がどの程度変動するかという安定性の階層も同時に確認できる。

これに対し、表中で●がついた所有物依存動詞では、まず平均 μ に基づく主語選択の偏りの点で動詞間に差がある。*katika*「切れる」、*chubuka*「擦りむく」、*fumbuka*「開く」、*ng'oka*「抜ける」、*ota*「生える」、*vimba*「腫れる」のように所有者主語寄りに位置づけられる動詞がある一方、*potea*「なくなる」、*ruka*「飛ぶ」、*toka*「出る」、*pungua*「減る」、*uma*「噛む」のように所有物主語寄りに位置づけられる動詞もある。このように、所有物依存動詞の内部にも、主語が所有者寄りか、所有物寄りかという主語選択の方向性という階層が成立する。主語選択の変動の大きさを分散 σ^2によって捉えると、*pungua*「減る」は分析対象となる動詞の中で最も分散が大きく、同一動詞の内部で主語選択が大きく分岐しやすいことを示す。また *chubuka*「擦りむく」や *katika*「切れる」、*toka*「出る」も分散が比較的大きく、平均 μ の値にかかわらず、所有物ごとに所有者主語寄りの場合と所有物主語寄りの場合が混在しやすい動詞である。他方で、*vimba*「腫れる」や *uma*「噛む」のように分散が比較的小さい動詞もあり、所有物依存動詞に含まれつつも、主語選択の変動は相対的に限定的である。

ここまでみてきた主語要素の現れ方のパターンと動詞の意味的特徴の対応関係に着目すると、以下のような傾向がみられる。まず、感情動詞の *furahi*「喜ぶ」と *choka*「疲れる」は、いずれも所有者のみを主語にとる動詞として現れた。動作動詞では、*piga*「殴る」は所有物のみ主語にとることができ、*uma*「噛む」は共起する所有物によって主語が異なるが、所有物を主語にとりやすい。これに対し、移動動詞と増減動詞は、所有者のみを主語にとる条件には分布せず、所有物主語のみを許す条件、所有者・所有物の双方を主語にとりうる条件、あるいは共起する所有物によって主語が変化する条件に現れる。状態動詞はさらに多様であり、4 つの主語選択パターンのすべてに分布する。このことから、移動動詞と増減動詞と状態動詞は、それぞれの動詞の意味分類だけで主語選択の条件を一義的に特徴づけることはできないといえる。

本論文は動詞を軸に階層化したが、例外的に所有物が強い主語選択の制約を持つ場合がある。例えば、*shati*「シャツ」、*nguo*「服」、*soksi*「靴下」、*viatu*「靴」といった衣服を表す所有物の要素は、共起する動詞に関わらず所有者のみを主語にとる。

(14) a. Ni-me-katika　　shati.
　　SM1sg.-PER-切れる　5.シャツ

「私はシャツが切れた」

b. *Shati　　li-me-ni-katika.

5.シャツ　SM5-PER-OM1sg.-切れる

(14)は、「私」が着用中のシャツが切れたことを表す。*katika*「切れる」自体は、共起する所有物の要素によって主語にくる要素が異なるが、*shati*「シャツ」と共起する場合には、所有者を主語とする(14a)が用いられ、所有物を主語とする(14b)は非文となる。

どの動詞と共起しても主語交替可能となる所有物の要素は、*machozi*「涙」、*makamasi*「鼻水」、*mate*「唾液」、*ngozi*「皮膚」、*kiko*「パイプ」である。

(15) a. Ni-li-toka　　machozi.

SM1sg.-PST-出る　6.涙

「私は涙が出た」

b. Machozi　ya-li-ni-toka.

6.涙　　SM6-PST-OM1sg.-出る

「私は涙が出た」

(15)は、「私」が泣いている場面を表す。動詞 *toka*「出る」は、所有物の要素によって主語にとる要素が異なる。常に主語交替可能な *machozi*「涙」が *toka*「出る」と共起すると、(15a)と(15b)のように主語交替が可能となる。このように、所有物の要素の側で常に主語選択が決まっているものもある。

３．まとめと考察

本論文の 2 段階の階層は、主語選択が単に所有者か所有物かを決める問題ではなく、まず動詞が主語選択の自由度を規定し、そのうえで交替可能・所有物依存動詞の領域において、どちらを主語として選択しやすいかと、所有物に応じてその選択がどれだけ変動するかが動詞ごとに異なるという構造を示している。これらの階層から、動詞の意味的性質と関連づけて概ね以下のような傾向が確認された。

まず、平均 μ をみると、所有者を主語にとる傾向にあるのは感情と状態の意味を持つ動詞群である。感情を表す動詞は、必ず所有者のみを主語にとる。状態動詞の中には、必ず所有物が主語になる動詞や交替可能でも所有物主語寄りの動詞もみられるが、所有物が常に主語になる 3 動詞 *simama*「立つ」、*cheza*「遊ぶ」、*waka moto*「火が燃える」は共起する所有物が全て 1 つのみであり、交替可能で所有物主語寄りの動詞は *kauka*「乾く」のみ、他の 9 動詞は必ず所有者を主語にとるか交替可能でも所有者主語寄りである。このことから、状態動詞は、共起する所有物の種類数や動詞の分布数を考慮すると、所有者を主語にとる

傾向にあるといえる。所有者を主語にとる傾向にある動詞は、動詞の表す状況において、所有者自身を主体として捉えるのが自然とされるものであると考えられる。

次に、主語に所有物をとりやすいのは、移動動詞と動作動詞である。移動動詞は平均の最大値が 0、つまり対称的交替がみられるもので、最小値は-2、つまり必ず所有物が主語になるものとなり、その間の所有物主語寄りの値に全ての移動動詞が含まれることから、所有物を主語にとりやすい傾向にある。動作動詞は *uma*「噛む」と *piga*「殴る」の 2 つのみだが、どちらも平均が負の数であることから、所有物主語寄りであるといえる。移動動詞と動作動詞は、動詞が表す意味が、所有物自体の状態や変化として捉えられやすい動詞であるため、所有物を主語にとる傾向があると考えられる。主語の傾向が所有者と所有物どちらにも振れず、動詞ごとの平均の差が大きいのは、増減動詞である。増減動詞は平均が負となる動詞と正となる動詞と 0 となる動詞全てに分布がみられることから、増減動詞全体での主語選択の偏りを見出しにくい。つまり、所有者を主体とする状態を表す動詞と所有物を主体とする状態を表す動詞と、どちらでも表現可能な動詞が増減動詞の意味分類に含まれている。このように、動詞の意味分類は主語選択の傾向の理解には寄与するが、階層全体を決める十分条件ではなく、動詞固有の語彙的性質や共起する所有物との組み合わせによる出来事の提示のされ方が、主語にどの要素がとられるかに関する分岐や安定性の差として現れている可能性が高い。

一方で、分散 σ^2は、共起する所有物の種類に応じて主語選択がどれだけ変動しやすいかを表す指標である。そのため、共起可能な所有物の種類数 *N* が多い動詞や、異なる意味領域の所有物と広く共起する動詞ほど分散が大きくなり得ると予測されるのが自然である。確かに、分散が 3 番目に大きい *toka*「出る」は共起できる所有物（*N*）が 21 であり、その所有物の意味分類も外部器官、感情、分泌物などを含め 8 種類にわたる。しかし、分析対象となる例文では、共起可能な所有物の種類数の大小や所有物の意味分類の多様さが、そのまま分散の大小に対応しない例も確認された。例えば分散が 1 番大きい *pungua*「減る」は共起できる所有物は 4 で、表中の共起可能な所有物の種類数の平均 5.6 を下回っており、所有物の意味分類も感情、炎症、分泌物の 3 種類であるのに対し、分散が 0 の *nuka*「匂う」は、13 の所有物と共起可能で、それらの所有物の意味分類も、外部器官、分泌物、周辺要素、モノの 4 種類であり、共起可能な所有物の種類数も所有物の意味分類の多様さも分散が低い動詞の方が上回っている。したがって、分散は必ずしも共起する所有物の種類数とそれらの所有物の意味分類の豊富さによって決まるわけではなく、こうした共起可能性の広さに加え、当該動詞が出来事を所有者と所有物のいずれを主体として提示しやすいかという語彙的特性や、個別の所有物との結びつきに由来する解釈の差が反映されている可能性がある。

このように、先行研究で指摘されてきた、出来事が所有者の状態として把握される場合には所有者主語が、所有物の状態として把握される場合には所有物主語が自然になること

（小森 2013: 167-168）と、同様の傾向が本論文でも確認された。ただし本論文では、こうした一般的傾向を再確認することに加え、主語選択を点数化して平均と分散により定量化し、主語要素が一定に定まる動詞と、所有物に応じて主語要素が分岐する動詞とを区別し、主語選択の「自由度」そのものが動詞によって階層化されることを示した。さらに、同じ意味分類に属する動詞同士の細かな差、ならびに交替可能動詞、所有物依存動詞という枠内での段階差を可視化した。これにより、所有者と所有物のどちらを主語にとるのが自然かという一軸の記述では捉えにくい、交替の安定度や所有物依存性の強弱といった差異を、動詞間の階層として具体的に提示することが可能となった。

本論文は、動詞の階層に焦点を置くため、所有物の要素の詳細な分析は行わず、主に動詞によって決まる主語選択の範囲について記述した。その妥当性を補強することとして、分析対象となる例文のうち、多くの所有物は、どの所有物かよりも、どの動詞と結びつくかによって主語要素が決まる傾向が強かった。すなわち、所有物側が主語選択を固定するというより、動詞側が許す選択肢の中で所有物が振る舞う局面が広い。他方で、所有物側が一貫して主語選択を制約する例も確認された。常に所有者主語となる衣服は、主語への所有者上昇構文が所有者の状態として解釈されやすい所有物である可能性がある一方、*machozi*「涙」、*makamasi*「鼻水」、*mate*「唾液」、*ngozi*「皮膚」、*kiko*「パイプ」が常に主語交替可能である点は、出来事が所有者・所有物いずれの観点からも自然に提示されうる所有物が存在することを示す。したがって、本論文の動詞中心の分析は主語選択の主要部分を説明しているものの、所有物の恒常的制約を例外として切り捨てるのではなく、主語選択を動詞と所有物の相互作用として位置づけ直す余地があることを意味する。

４．おわりに

本論文では、スワヒリ語の主語への所有者上昇構文において、動詞が主語選択にどのように関与するかを定量的に記述し、動詞間の階層を明らかにすることを目的とした。分析の結果、主語選択に関して、まず主語要素が一律に定まる動詞と、共起する所有物によって主語要素が分岐する動詞という区別があり、さらに主語交替可能動詞および所有物依存動詞の内部では、主語選択の偏りと変動という 2 軸から動詞間の差がみられた。先行研究で述べられてきた、出来事の主体が所有者と所有物のいずれであるかが主語選択に影響するという傾向は本論文でも概ね確認されたが、本論文では、さらにそれを定量化し、動詞の同じ意味分類や同じ主語選択パターンの内部に存在する段階差までを階層として可視化した。

本論文は動詞の階層に焦点を置いたが、主語選択には動詞のみならず所有物の要素や、談話条件が影響する可能性があることから、今後はこれらの影響を分析していく必要があるだろう。また、本論文の結果は Isack 氏への聞き取りに基づくため、話者差・地域差により異なる結果が得られる可能性がある。しかし同時に、今後、複数地域に同一手法を適

用して差異を検証することで、主語への所有者上昇構文の理解を一層深めることができると考えられる。

参考文献

古閑恭子. 2024.「アカン語における主語交替について」『スワヒリ&アフリカ研究』35, 103-120.

小森淳子. 1991.「スワヒリ語にみられる主語交替現象について」『言語学研究』10, 1-22.

−−−−−−−2013.「スワヒリ語のいわゆる『壁塗り交替』構文について」『スワヒリ&アフリカ研究』24, 159-170.

中島久. 2000.『スワヒリ語文法』大学書林.

米田信子. 2016.「スワヒリ語における『〜ハ〜ガ』構文および類似する構文」『スワヒリ&アフリカ研究』27, 17-36.

−−−−−−−2022.「歴史言語学からみるバントゥ系民族の移動」荒川正晴・大黒俊二・小川幸司・木畑洋一・冨谷至・中野聡・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直己・吉澤誠一郎（編）『岩波講座　世界史 18 アフリカ諸地域　〜20 世紀』pp.201-222. 岩波書店.

米田信子・若狭基道・塩田勝彦・小森淳子・亀井伸孝. 2011.「アフリカ講座　アフリカの言語」『アフリカ研究』78, 43-60.

Bostoen, Koen & Mark Van de Velde. 2019. “Introduction” in: Mark Van de Velde, Koen Bostoen, Derek Nurse & Gérard Philippson (eds.), *The Bantu Languages.* 2nd edition. pp.1-13. Routledge.

Chappell, Hilary & William McGregor. 1996. "Prolegomena to a theory of inalienability" in: Hilary Chappell & William McGregor (eds.), *The Grammar of Inalienability: A Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation*. pp.3-30. Mouton de Gruyter.

Dzahene-Quarshie, Josephine. 2016. "Inalienable possession constructions in Akan and Kiswahili" *Kiswahili*. 79(1), 93-105.

Fox, Barbara. 1981. "Body part syntax: Towards a universal characterization." *Studies in Language*. 5, 323-342.

Harries, Lyndon. 1970/71. "Inalienable possession in Swahili" in: David Dalby (ed.), *African Language Review*. pp.140-147. Frank Cass.

Hinnebusch, Thomas J. & Robert S. Kirsner. 1980. "On the inference of 'inalienable possession' in Swahili" *Journal of African Languages and Linguistics*. 2, 1-16.

Hyman, L. 1996. "The syntax of body parts in Haya." in: Hilary Chappell & William McGregor (eds.), *The Grammar of Inalienability: A Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation*. pp.865-890. Mouton de Gruyter.

Keach, Camillia N. & Michael Rochemont. 1992. "On the syntax of possessor raising in Swahili" *Studies in African Linguistics*. 23(1), 81-106.

Kyei-Mensah, Josephine. 1998. *Inalienable Possession: An Aspect of the Syntax of Personal Reference in Swahili*, Ph.D. dissertation, University of London.

Marten, Lutz. 2021. "Noun classes and plurality in Bantu languages" in: Patricia Cabredo Hofherr & Jenny Doetjes (eds.), *The Oxford Handbook of Grammatical Number.* pp.539-557. Oxford University Press.

Myers-Scotton, Carol. 1981. "Extending inalienable possession: The argument for an extensive case in Swahili." *Journal of African Languages and Linguistics*. 3, 159-174.

Payne, Doris L. & Immanuel Barshi. 1999. "External possession: What, where, how, and why." in Doris L. Payne & Immanuel Barshi (eds.), *External Possession*. pp.3-32. John Benjamins Publishing Company.

TUKI (Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili). 2014. *Kamusi ya Kiswahili Sanifu.* 3rd edition. Nairobi, Oxford University Press.

Van de Velde, Mark. 2020. "Concernee-concern constructions: A comparative study of external possession in the Bantu Languages." *Studies in Language*, 44(1), 70-94.

Voeltz, E.F.K. 1976. "Inalienable possession in Sotho" *Studies in African Linguistics, Supplement*. 6, 255-266.